

1

[報告 | report]

[2012年度入試説明会講演 | 働きながらアーカイブズ学を学びませんか? —— 1]

理想のアーキビストを目指して^[1]

Let's Study Archival Science: From a Student

中臺綾子 | Ayako Nakadai

はじめに

こんにちは。本日、学習院大学大学院人文科学研究科アーカイブズ学専攻の入試説明会の一部として、お話をさせていただきます博士後期課程3年の中臺綾子と申します。本日のテーマは「働きながらアーカイブズ学を学びませんか?」ということですので、仕事をしながら大学院に通う私の日常生活をご紹介しますと思います。

1 —— アーカイブズ学との出会い

まずは簡単に自己紹介をさせていただきます。私は1999年に横浜市立大学の国際文化学部日本アジア文化学科に入学し、古代史一主として平安から室町にかけての王権論一を専攻しました。学部生が古代史を研究するには、まず翻刻・出版された史料集を読むのが定石だと思います。私も活字になった史料集を活用していたのですが、ある日ふと「自分の見ているこの史料の現物はどこにどのような形で残されているのだろうか?」と思いました。それが資料保存について意識し始めた最初になります。ただその時、研究の素材として使っていたのは重要文化財などに指定されている史料

でしたので、どちらかという興味の方は文化財保存に向いていました。

アーカイブズ学という言葉を知ったのは2001年、大学3年生の時に図書館でここに居られる安藤正人教授の『記録史料学と現代——アーカイブズの科学をめざして』を読んだのが最初です^[2]。あの時の衝撃は今でも忘れられません。文化財保存とはまた異なる視点で、地域に残る資料を積極的に活用し、後世に残していくための学問があることを知りました。時を同じくして、日本史研究室の扉に国文学研究資料館が主催する「アーカイブズ・カレッジ」のポスターが掲示されました。当時は、受講資格が大学院生か現場の職員に限られていたこともあり、私はアーカイブズ・カレッジを受講したいがために、大学院へ進学することにしました。しかしながら当時は、アーカイブズ学を専門的に教える大学院は存在しませんでした。「アーカイブズ学」という名前ではないけれども、東京大学大学院人文社会研究科文化資源学研究専攻と神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科が近い分野のことをやっていたので、色々検討した結果、古文書の整理や修復の授業がカリキュラムに入っていた神奈川大学大学院に進学しました。

大学院進学後は、念願のアーカイブズ・カレッジを受講し

ました。夏休み1か月の集中講義でしたが、アーカイブズ学の様々な領域を学ぶことができ、私はますますアーカイブズ学にのめり込んでいきました。2004年には、ここ学習院大学大学院人文科学研究科の中に、アーカイブズ学関連の専門科目「史料管理学」の授業が開講されたため、科目履修生として履修し始めました。また国文学研究資料館の共同利用研究員となり、神奈川大学大学院の指導教授とは別に安藤先生からも直接の指導を得ることができ、充実した日々でした。修士論文は「民間資料の保存・利用における自治体文書館の役割」と題して、当時主張されていた「自治体文書館(公文書館)は公文書を第一に扱うべきだ」という論に対して、それまで自治体文書館が果たしてきた民間資料(古文書)保存の重要性についてまとめました。

2 — アーカイブズの世界で生きる決意

修士時代はアーカイブズ学の魅力に夢中になる一方で、常に将来に不安を抱いていました。アーカイブズ学を学べば学ぶほど、アーカイブズ学の深さと多様性に翻弄され、また自治体文書館に調査に行く機会が増えると、理論と現場における実務の差をまざまざと感じるようになり、学問を追求し続けていく自信がなくなってきました。しかしやはりアーカイブズのことは好きでしたから、不安に思う中でもやがて「アーカイブズに関わる仕事で生計を立てたい」と決意するようになりました。

幸運にも修士2年生の時に、大学院の先輩からの紹介で、国立公文書館で資料修復の仕事に就くことができました。週3日の非常勤職員でしたが、実際に公文書館の中で実務に携わることができました。大学院修了後もしばらくは国立公文書館でお世話になり、平行して学習院の授業も履修しておりましたが、2005年に千葉県文書館県史・古文書課に週4勤務の嘱託職員として雇用され、今度は自治体文書館で民間資料の保存・整理業務に携わることになりました。国立公文書館での修復業務は、黙々と資料と向かい合う仕事でしたが、千葉県文書館での業務では、資料だけでなく利用者・資料の所蔵者の方とも接する機会があり、私が理想とする「人と資料を繋ぐ場としてのアーカイブズ」を実現できそうな職場でした。しかし、少々意気込み過ぎていたのかもしれない。自治体文書館での民間資料の管理については、修士論文で扱ったテーマであり「分かっている」というおごりもあったのだと思いますが、それまで学んできた理論が自治体



文書館の現場ではうまく通用しないことに憤りを覚えることが多々ありました。また当時はまだ若かったために職場での立ち回り方がよくわからず、業務とは関係ない場面でストレスを感じることもありました。今にして思えばそれは特別なことではなく、新入社員のみなさんが一度は体験する経験だったのではないかと思います。

国立公文書館、千葉県文書館での業務はとても得るものが多かったのですが、非常勤職員ではとても社会人として自立できるだけの収入は見込めませんでした。大学院を修了し、念願のアーカイブズの現場で働き始めても、将来に対する不安はついてまわりました。加えて非常勤職員は限られた業務しか任せられないので、専門職としての責任を追及されないことが物足りなく、一人のアーキビストとして自立できていないのではと思い始めました。

現在勤務している企業アーカイブズの募集を見つけたのは、そんな時でした。それまで専門としてきた古文書とは性質の異なる資料を扱うことになりますし、国や自治体の文書館しか経験したことのない自分に企業アーキビストが務まるか悩みましたが、資料保存の仕事で身を立てたいと思っていた私にやはり正社員の立場は魅力的で、企業アーカイブズに勤めることにしました。企業アーカイブズに勤めるといっても、私

が就職したのはレコード・マネジメントの会社でした。もともと企業の文書管理を行っている会社が、委託業務として企業アーカイブズの運営を受託していて、そこへ配属されるということでした。そのためアーカイブズとは全く異なる職場への配置替えの可能性があるということを採用面接の時に言われました。それでも、その会社の中核業務はレコード・マネジメント、つまりはアーカイブズ学とも関連の領域ですから、もし配置換えになってもいい経験になるだろうと、前向きにとらえることにしました。フルタイム勤務の正社員となって企業アーカイブズで働き始めたのが2007年です。幸運にも現時点では配置換えはなく、企業アーカイブズで収蔵資料や収蔵庫の管理、来館者の対応などの業務をしております。

3 — 働きながら学ぶことを選んだ理由

企業アーカイブズで働き始めてからも、学習院大学の科目履修は続けていました。アーカイブズ学関連の授業は18時からで、仕事帰りに受講できて助かりました。2008年にはついに学習院大学大学院にアーカイブズ学専攻の博士前期課程・後期課程が設置されました。非常に嬉しく思いましたが、開設当初は入学することは考えていませんでした。仕事が軌道に乗り始めていたこともありましたが、修士論文の際に経験した底の見えないほど深いアーカイブズ学に再度飛び込む勇気が持てなかったのです。しかし専攻の学生たちの様子を見たり、授業の内容を聞いたりすると、やはりきちんと学んでみたいという気持ちが次第に強くなっていきました。修士号はすでに取得していましたので、入学するなら博士後期課程だと思っていましたが、果たして私に博士論文が書けるだろうか、業務と両立できるだろうかと悩み、2009年度は授業料が比較的安い研究生として、安藤先生に指導してもらいました。とりえずアーカイブズ学専攻の授業を受けてゼミに参加すれば、もしかしたら知的欲求は満足するかと思ったのですが、結局は満足できずに、2010年、博士後期課程に入学することになりました。

アーカイブズ学専攻博士後期課程への入学を決意した背景には、やはり日々の業務の中で、理論と実務の乖離を感じたことが大きかったように思います。理論と実務の隔たりは千葉県文書館から企業アーカイブズに職場が変わっても付きまといました。どちらかというと企業アーカイブズで勤務し始めてからの方がより強く感じました。会社には会社独特のやり方や考え方があります。理論では「こう考えるべき、こうすべ

きだ」とあるのに、現場では様々な問題で理論通りには事が進まない。それを「だから理論は駄目なんだ」あるいは「だから現場は駄目なんだ」とお互いを批判することは簡単です。私も最初は「なぜ理論通りにできないんだ」と実務を非難していました。けれど業務経験と年齢を積み重ねる中で、それでは進展は見込めないのだと理解しました。アーカイブズ学は理論と実務を両輪に持つ学問ですから、それでは発展がない。会社員として、アーキビストとして現場を知り、学生として理論を学ぶことで、理論と現場を繋ぐ懸け橋になればと思います。

また正社員として就職したことによって、将来への不安が軽減したことが、学問へと目を向かわせる余裕に繋がりました。金銭的にも精神的にも余裕ができたために、これまではない落ち着いた視点で学問に向き合うことが出来ました。そして女性としての人生を考えた時に、独身の今しか自由な時間はないかもしれないとも思いました。これは以前は全く考えなかったことです。大学3年の時から、アーカイブズ学を学び、アーカイブズの仕事をして身を立てることしか考えてきませんでした。やはり年を重ねると結婚や出産もしたいと思うようになりました。出産・育児が始まってしまうと、仕事と生活を両立させるのが精一杯で、学ぶことまで手が回らないかもしれない。だったら、その前にやりたいことはチャレンジしてはと思い、博士後期課程への進学を決めました。結局、私は昨年末に入籍しまして、現在は企業アーカイブズでのアーキビスト、学習院大学の大学院生、そして主婦という肩書を持って生活をしています。

4 — 日常生活について

次に、実際の生活スケジュールをご紹介します。今年度は、水曜日6限に行われる海外文献を読む授業(アーカイブズ学理論研究Ⅲ)と木曜日6限の法律関係の授業(アーカイブズ・マネジメント論研究Ⅰ〈法制論〉)、そして土曜日午後のアーカイブズ学演習(ゼミ)の合計3コマ12単位を履修しています。アーカイブズ学専攻の授業は、先生が説明されるのを聞く聴講型の授業より、学生が個々に与えられた課題を報告する形の授業が豊富です。例えば、「アーカイブズ学理論研究Ⅲ」では英語論文の要約発表、「アーカイブズ・マネジメント論研究Ⅰ〈法制論〉」では、公文書管理法などアーカイブズ学に関係する法律の逐次解説などを行います。自ら報告を行い、議論を交わす授業は、内容を深く理解するのに

非常に役立ちます。「アーカイブズ学演習(ゼミ)」では、自ら発表を行うのは年に2回程度で、それ以外は他のゼミ生の報告を聞き、議論します。アーカイブズに関連する様々な分野の報告を聞くことができ、視野が広がる機会です。

授業がある日は、会社がフレックス勤務を認めてくれているので8時20分から17時まで勤務し、その後大学へ。18時から6限の授業を受けて20時30分頃帰宅します。授業のある日は、基本的に帰宅後は勉強していません。水曜日・木曜日という週の半ばということもあり、少し疲れていますので自分の休息と家事に充てています。

授業がない平日は、8時40分から17時20分まで勤務したのち帰宅し、家族が帰宅する22時ぐらまで授業で出される課題に取り組んだり、自分の研究に必要な論文を読んだりしています。その後は夕食と家事をして、24時には就寝するようにしています。

ゼミがある土曜日は、いつもよりは多く睡眠をとり8時ごろ起床。洗濯・掃除など家事をした後、家を出て、13時のゼミに出席します。ゼミは議論が白熱すると長くなったりしますが、大体15時ぐらまでです。その後は、有志で行っている勉強会に出席したり、勉強会がない日は、図書館やアーカイブズ学専攻の閲覧室で自分の研究の調べものをします。平日の授業後に図書館に行くこともありますが、基本的に論文のコピーなどは土曜日にまとめてするようにしています。そして夕飯に間に合うように18時ごろには大学を出て帰宅し、土曜日の夜と日曜日は家族サービスに時間を割くことが多いです。

おそらく他の大学院生に比べると、研究に費やしている時間は圧倒的に短いかもしれません。平日の日中は仕事をしていますし、主婦でもあるので家事もしくちゃいけませんし、家族と過ごす時間も必要です。私はあまり器用な方ではないので、仕事や家事の合間のわずかな時間に論文を読んでも全く身につかないので、家事はなるべく溜めておいて一気にやることで、まとまった研究の時間を確保するようにしています。メリハリをつけた時間の使い方が、会社員としても、大学院生としても、主婦としても大切だと思っています。また大学院に入ってから、体調管理は非常に大切だと思いました。体調が悪いと研究はできませんし、仕事にも影響を及ぼしてしまい、会社や同僚にも迷惑をかけてしまうので、なるべく睡眠の時間は削らないようにしています。とはいえ、学会報告の前や原稿の執筆中は時間が足りなくて、睡眠時間を削ったり、有給休暇を使って仕事を休んで取り組んだりすることもあります。

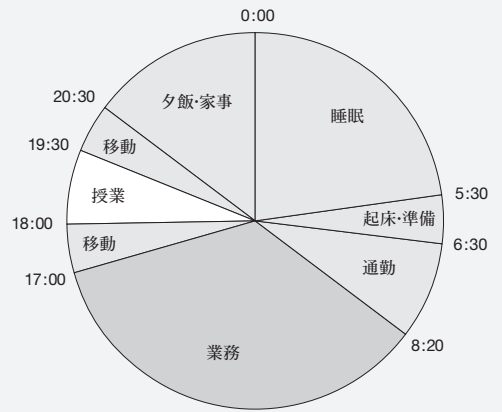


図1 — 授業がある平日のスケジュール

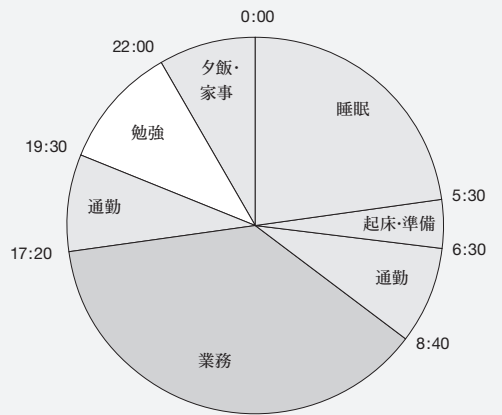


図2 — 授業がない平日のスケジュール

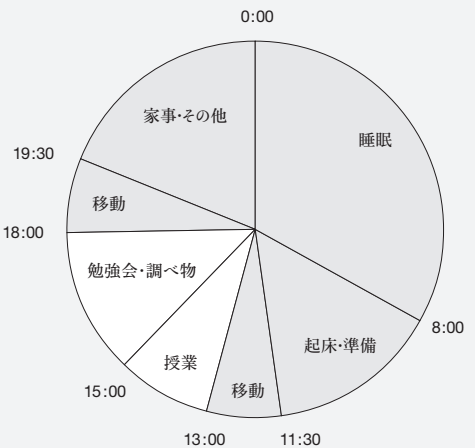


図3 — 土曜日のスケジュール

なぜアーカイブズ学専攻に入学したのか？

- 理由① 資料保存の現場に出てみて感じた問題
理論と現場の乖離
- 理由② アーカイブズ学をきちんと理解していない
- 理由③ すでに就職していたので、学問に向かう余裕がある
- 理由④ すでに就職していたので、金銭的にも余裕がある
- 理由⑤ 最高の教師陣 & 良い環境

アーカイブズ学のことが大好き

取得単位

学年	単位数	授受名
研究生	8	記録学専攻特選Ⅱ_アーカイブズ・マネジメント論研究Ⅰ上 情報記録学Ⅱ
D1	8	アーカイブズ・マネジメント論研究Ⅱ_アーカイブズ学演習
D2	8	アーカイブズ・マネジメント論研究Ⅲ_アーカイブズ学演習 情報記録学Ⅰ
D3	(12)	アーカイブズ学演習研究Ⅳ_アーカイブズ・マネジメント 論研究Ⅰ、アーカイブズ学演習
合計	36/20	

週2〜3コマ履修すれば単位取得は容易。
ただし履修時間が限られるので、受けたい授業を
受けられないことも。

研究テーマ

企業アーカイブズに関する研究

- ・社会的遺産として企業資料をどう保存・利用していくか
 - ・倒産などによって消滅した企業資料の行く先
- (素材・視点) 法律、CSR_諸外国の事例に学ぶ

社会の中で企業資料を有効活用するしくみを模索中

働きながら研究するということ

- ・大変なのは大変（主として時間の使い方）
- ・大学院の研究⇔業務での資料保存 相互作用
- ・共に学ぶ仲間がいる
- ・文献など研究環境

大変なこと多いが、実りも多い

5 — 単位取得・学費等について

単位の取得に関してですが、私は研究生の時に履修した科目を振り替えることができたこと、毎年10-12単位(授業2コマとゼミ)の授業を履修していましたので、単位の心配はありませんでした。ただ平日18時からの授業か土曜日の授業しか取れませんので、希望の授業がなかなか履修できないということはありました。しかし時間割は年度ごとに変りますので、在学期間中に希望の授業はほぼ履修することが出来ました。平日は仕事があって授業を履修できないという方も、土曜日に授業に出ることができれば、単位取得の心配はないかと思います。

また資金についてですが、学費はすべて自分で用意しました。入学当初は奨学金を申請することも考えていましたが、神奈川大学での博士前期課程在籍時にすでに奨学金を受け、返済途中であったことから、それまでの勤務で貯めたお金やボーナスを学費に充てることにしました。正社員とはいえ薄給なので、学費の捻出は簡単ではありませんでしたが、実家住まいでしたので、生活費にあまりお金をかけず自分のしたいことにお金を注ぎ込むことができたのは幸いでした。学費のほかに必要となる研究に係る費用は、大学に申請をするといいただける研究費で賄っています。年間20万円ですが、遠方で開催される学会で報告する時などは別途補助金が出ますので、専門図書の購入をはじめ日々の研究に必要なものはすべてそこから出すことができ、とても助かっています。

6 — 研究テーマと成果、そしてこれから

このような生活の中で、私は企業アーカイブズに関する研究を行っています。日頃勤務をしながら思うことは、企業が日々生み出す資料は公文書などと同じく社会にとって重要な資産であるにも関わらず、有効に活用されていないということです。社会的資産としての企業資料をどう保存・利用していくのか、また倒産などによって消滅した企業の資料をどう保存していくのか、さまざまな法律や企業を取り巻く状況、海外の事例などを学びながら、社会の中で企業資料を有効活用するしくみを模索しています。

博士後期課程の3年間での実績は学会報告2本に加え、『世界のビジネス・アーカイブズ』という本に翻訳を1本掲載させていただきました[3]。日々の授業課題などに追われ

て、当初考えていたほどの成果を挙げることができなかったことが残念です。しかしすでに書くべき論文の方向性は定まっています、今後は諸外国の事例検討や国内企業の資料所在調査をする予定です。

博士論文というのはやはり大きな存在で、簡単に出来上るものではありません。博論を完成させるには土台となる執筆論文が圧倒的に不足していますし、企業アーカイブズに対するものの見方も未熟だとこの3年間で痛感しました。博論は目標ではありますが、ゴールではありません。私にとって重要なのはこれからもアーカイブズ学と関わり続ける人生を継続していくことです。

今までの学校生活・職場生活を経て、私はアーカイブズ学とは、理論と実務の学問であり、資料が描き出す過去・現在・未来と人々を繋ぐ学問だと考えるようになりました。アーカイブズ学は果てしなく広く、果てしなく深い。そのような学問に向かうには、理論も実務も理解し、人として広く深い知見・視野を得ることが必要であり、それが可能となって初めて私はアーカイブズ学を担い、人と資料を繋ぐ一人前のアーキビストになれるのだと思います。

そのために細くとも長く、仕事と研究を続けていくことが肝要であり、それを実現できるような人生設計が今後の課題です。仕事をして結婚しても、アーカイブズ学と繋がりが続けたように、これから出産や育児、そして年齢を重ねても、アーカイブズ学と関わり、実務と関わり続ける人生を歩んでいきたいものです。

まとめにかえて

働きながら研究するという事は、簡単なことではありません。両立を可能にするには、2つのポイントを押さえる必要があると私は思います。1つは時間の使い方です。仕事をしていると日中の大部分の時間は業務に費やされます。帰宅後の時間をいかに有効に活用するかがとても重要です。そして2つ目は周囲の協力です。18時からの授業を履修するために、会社には格別の便宜を困ってもらいました。そして一緒に仕事をする同僚にも迷惑をかけたことだと思います。また週末の土曜日は大学に行ってしまうので、一緒に生活をする家族の理解もありがたかったです。

大変ではありますが、文献などの研究環境が整っていること、またなにより素晴らしい先生方に教えを乞い、共に学ぶ仲間がいるというのは、大学院の素晴らしい所だと思います。

ありていと言えば、研究は自宅でやろうと思えばできます。しかし壁にぶつかった際に教え導いてくれる先生やアーカイブズ学のことを語る仲間は、自宅には得ることはできません。論文を書き、研究を進めるというのは孤独な作業ですから、彼らのような同志は、とても心の支えになります。働きながら研究するという事は大変なことも多いですが、得るものもまた多くあります。もしここにおいでの方で、仕事と研究の両立で迷っている方がいらっしゃいましたら、思い悩むよりもまず飛び込んでみることをぜひお勧めいたします。

本日はご清聴ありがとうございました。

1 — この講演は2012年10月20日(土)に開催された、入試説明会に伴う講演会「働きながらアーカイブズ学を学びませんか? — 在学生・修了生の声」の記録である。当時、博士後期課程3年次に在籍。

2 — 安藤正人『記録史料学と現代 — アーカイブズの科学をめざして』、吉川弘文館、1998年

3 — 中臺綾子訳、アレクサンダー・L・ビエリ「企業のDNA — 成功への重要なカギ」、公益財団法人渋沢栄一記念財団実業史研究情報センター編『世界のビジネス・アーカイブズ: 企業価値の源泉』、日外アソシエーツ、2012年、213-228頁